

# 農家の嫁さんの法則

ジャム工房 緑夢(ミドリーム)ファーム

代表 寺町敬子

あくまでも私個人の  
考えであることを前置きして、  
綴っていきます。

綴っていきます。

生まれも育ちも、社会人として仕事をしていたのも地元だったので、若いころは「農家と漁師と地元の人とは結婚しない！」と心に決めていたのに、何を間違ったのか・血迷ったのか：地元で、しかも農家の夫と結婚してしまい(笑)三年になる。

その間、なんとなく思っていたのが「農家の嫁さんの法則」である。

## ◆ 一年目

その当時は、結婚を機に自分は仕事・習い事・趣味をやめて農家の嫁としての務めに入るのが当たり前だった。夫が農家であることは、キャラメルのおまけのごとく農作業が付いてくる。ただ、一年目は周りが超初心者である嫁を優しくフォローしてくれる。当の嫁も、やるこ

となすことが初めてづくしなので、何をやっても新鮮！しかも若くて体力もあるので、少しぐらいきつい仕事でも一晩寝れば翌日には元気に働けてしまう。

## ◆ 二年～三年

子供も、一人くらいできていて一年の流れもぼんやりと分かってくるこの頃は、意外ときつい農作業と子育て家事との狭間で、気持ち疲れ始めてくる。「大丈夫か？このまま続けていけるかな…今ならわかれても一人でやっつけていけるかな」と、独身の時の自由さとの違いに僅かな葛藤が始まる。

この頃に、『農の暮し』が自分に向いているのかいないのか考え始めてしまう。というのも、まだ地域にも溶け込めず、家の仕事というものと職業としての農業の区別もつきにくい、自分の立場と居場所戸惑う時期だからだ。

## 寺 町 敬 子(てらまち けいこ)さん



☆家族経営の畑作農家

☆夫・私・長男の3人で、約26ha(玉ねぎ・小麦・ビート・小豆)規模の農業を営んでいます。

☆信金職員として勤務の後、夫と結婚し農業に従事。

平成7年地元の仲間と共に、『ところよめさんねっとわーく・さくらちゃん』を結成。

☆平成15年緑夢(ミドリーム)ファームとして、自家栽培の果実・野菜を使い農産加工を始める。

☆「農の暮らしは、楽しい！」を、コンセプトに活動中です。

北海道女性農業者倶楽部(マンマのネットワーク) 副会長

北見市社会教育委員

北見市常呂自治区社会教育推進会議 会長

### ◆ 五年〜七年

子供の成長と共に学校などを通して自分の友人や地域の知人も少しずつ増え、家の中でも自分の立ち位置が確立され、農家の暮らしもなじんでくるこの頃は、家族の形も整いつつある反面、嫁としての扱いに差が出ている事に気が付いてくる。

他所の家族と共通することもあるが、家庭での立場の違いに不安や不満が膨らんでくるのである。

農作業も、手取り足取り丁寧に教えてもらうことも無くなる反面、自分の責任も増え体もきつくなり始める。疲れていると、何気ない一言が諍いのもとになったりもする。こんな時：「このまま農家の嫁で良いのだろうか？」という思いが頭をかすめてくる。「まだわかなくても、自活できる年齢だ

よ。」と悪魔の囁きも聞こえる頃だ。

### ◆ 覚悟の十年

このくらいになると、地域や学校などの役員などで外に出る機会も増え、家族の中も後継者から経営者になった夫と共に柱となっていく頃になる。

この頃が、『農家の嫁さん』としてこれから自分がどのように生きていくのか、覚悟を持つことが大切になるのではないかと思う。

余談であるが：私は、結婚して一〇年間一度も一泊以上の外泊をしたことがなかった。実家へ帰るのは別ではあるが、友人の結婚式も若妻会の泊りがけ研修も班内の温泉ですら：である。

一〇年を過ぎたころ、若妻会の役員をしたとき家族全員の前で「今度若妻会の一泊研修があるけど、役員もやっているし泊りで行きたい。」と話した時、「子供はどうするんだ」と言う夫の話をさえぎるように姑が、「みんな一人で寝られる

くらい大きくなっているのだから、行つてらっしゃい。」と言つてくれた。この言葉が夫を納得させ私の背中を押してくれた。今でも忘れられない出来事だった。

これをきっかけに、ほんの少し背中が軽くなり私の行動が一変した。出られるようになればこつちのもの。(笑) そうして、外に出て学ぶほどに「農家」であることがいかに素敵な事なのか、自分なんて豊かな暮らし(金銭的には貧乏だった)をしているのかを知ることが出来てきた。

「こんなに辛くきつい事を続けていくのだろうか？」という考えから、「もつと素敵なところを自ら見つける力を付けなくてはいけない」と変わり、大地から頂く「いのち」の素晴らしさを子供達にも伝えたいと変わっていった。

そのような頃、同じような想いで集まった仲間で作ったのが、『ところよめさんねつとわーく・さくらちゃん』(以下さくら)である。

#### ◆ 農業は宝箱

今年、さくらの活動を始めて二〇年になる。この間活動の根底にあつたのは以下の言葉であつた。

農業は宝箱…。

いろんな発見、いろんな感動が  
ぎゅしりつまっている。

まず知ること、

そして学ぶことから始めよう。

楽しく、笑顔でできる農業

やりがいがあつて、

誇りを持てる農業

私達のそんなちっぽけだけれど、

大切な大切な想いを込めて…。

さあ宝箱を開けてみよう！

発足当初、活動のひとつに『ファーマレットスクール』という農業の基礎を学ぶ講座を、企画・運営・講師の手配・開催場所の確保まで仲間と共に開催した学習の場の、『校則』のようなものが、い

つしか…さくらの理念になつていった。

この言葉は、仲間のひとりが牛舎仕事をしながら考えたものだ。

私達が、さくらの活動を始めた二〇年前は、この地域では異色の農家の嫁の集まりだったので、乗り越えなければならぬ余計な「壁」があつた。

#### ◆ 「出る杭」三段活用

前述の『ファーマレットスクール』を開講した当初は、町内の若い年代の女性を中心に四五名もの参加があつたが、「あんなものに出ると、ろくな嫁にならん。」などと男性(上の年代)から言われ参加しにくくなつた仲間もいた。

農協の職員からは、「はつきり言つて、君達の扱いに困っている。」とも…。

それでも、私達が続けてこられたのは、少なくなつたとはいえ今でも楽しくやれる仲間の存在と、私達の活動を理解し送り出してくれる家族、何かと相談にのってくれたり細かく疑問を解決してくれる

普及員さん、数多くはないが協力してくれる農協職員・行政職員など多くの人に支えられてきたのだと感謝している。

ただ…、やはり中には周りの心無い言葉などで辞めていく仲間が沢山いた。

そんな時思いついたのが、「出る杭三段活用」である。

出る杭は…打たれる

出過ぎた杭は…抜かれる

出ない杭は…腐る

抜かれたり、腐ったりして捨てられるより、打たれても「杭」として存在している方がずっと良いよね、と自らに言い聞かせていたことがあった。思えば随分遠い頃の事の様だが。

長く活動を続けていると兎角同じことの繰り返しが多くなるが、私達の活動にマンネリは一切なかった。

何故なら、同じ企画を続けてやらない、皆が一枚岩ではない、誰かの思い付きに共鳴できる、暴走する仲間を止める事が



出来る人がいる、適度な距離感、企画はさくらでやるが運営は周りを巻き込む（協力してくれる人が沢山いる）。目的別グループで皆が同じ目標を持たずにいたのが返って良かったのかもしれないと思っている。

何よりも…農業は面白いことがいっぱい詰まっている宝箱なのだから、いろんな事が出来て私達をわくわくさせてくれるものなのだ。山に「木」を植えるように、わくわくの「気」を植え続け、やがて自分が枯れる頃には、次の『農家の嫁さん』が新しい法則を考え出して欲しいと思う。  
(最終回)

■ ■ ■  
寺町さん、

一年間ありがとうございました。